

お約束のままに マタイ21:1~11 / 李正雨師

教会の伝統によると、今日、枝の主日からイースターである来週の日曜日の日の出の前までは、聖週間または受難週として過ごします。それで、明日から一週間、曜日ごとに「聖」という文字がつくようになり、これによってイエス様の十字架と死を覚える金曜日は、聖金曜日になるのです。聖週間に教会は、様々な集まりと礼拝を準備しますが、これはイエス様のエルサレムの入城と受難、死と復活を記念するためのものです。今はいろいろな理由によって、聖週間の代表性を持っている聖金曜日の礼拝だけを行っていますが、過去の教会では、この聖週間にはいろいろな集まりがあったそうです。今は消え去りましたが、16世紀の一部の教会では、聖水曜日を「裏切りの日」と明示して、イスカリオテのユダのような自分のことを懺悔して祈祷会を行ったそうです。そして聖木曜日の洗足と聖餐、聖金曜日のテネブライ、聖土曜日の持ち寄りのパーティーは、今も一部の教会で行われています。聖土曜日の持ち寄りのパーティーは、復活によって敗北した悪魔を嘲るパーティーと言い、皆がそれぞれ持ってきた料理と共に面白い話を交わすそうです。そして、このような聖週間のイベントは、イースター礼拝で仕上がります。イースター礼拝を終わりにして、教会は、受難と死、沈黙と懺悔から離れます。イースターの礼拝では、グロリアとハレルヤの歌が響き、聖壇は復活を象徴するユリで飾られます。復活の栄光が私たちのすべての暗闇を取り除くことを示すことで、四旬節と聖週間は終わります。

今日はこのような聖週間の始まりである枝の主日です。この枝の主日には、聖壇にナツメヤシの枝が飾られていますが、これはイエス様を歓迎し受け入れた「イエス様のエルサレムの入城」を象徴することです。当時の人々は、ナツメヤシの木の枝を折って振り、イエス様のエルサレムの入城を歓迎しました。ところが、このナツメヤシには、いろいろな意味が付いています。イスラエルでのなつめやしは、多産と祝福の象徴でした。詩編92編13節には、「神に従う人はなつめやしのようになり、レバノンの杉のようにそびえます」と書かれています。また、エルサレム神殿の壁全体になつめやしを浮き彫りにするほど、イスラエルでなつめやしは貴重なものと思われていました。それで、イエスさまの歓迎にこのなつめやしの枝が使われたのだと思います。

そして、イエスさまの歓迎にこの枝が使われた特別な理由がもう一つあります。聖書には書かれていませんが、イスラエルではハヌカーという祝日があります。この祝日は、旧約聖書の時代と新約聖書の時代の間でできた祝日です。当時のイスラエルは、セレウコス朝の支配を受けていました。新しいギリシャ王としてアンティオコス4世エピファネスが即位すると、彼は王権を強化するため、イスラエルに自分の文化と宗教に従うことを要求しました。イスラエルがこれを断ると、アンティオコス4世エピファネスは、エルサレムの神殿にゼウス像を建て、安息日と割礼を禁止し、自分を神として崇めることを強制しました。ちなみに、この王の名前のエピファネスは、神の顕現という意味です。

このことに対してユダヤ人は、反旗を翻して戦を起しました。反旗の中心には、祭司マタティアと彼の息子たちがいました。彼の息子の中では、ユダという息子が最も勇猛で、父マタティアが死んだ後、ユダは戦争を勝利に導きました。それで、この戦争の名を、ユダの別名であるマカバイから取って、マカバイ戦争と言います。マカバイは日本語で鉄槌という意味です。彼が戦場から勝利して帰ってきたとき、人々は彼を歓迎するため、なつめやしの枝を振り、再び神殿を神さまに奉獻することができたという意味でハヌカ（奉獻）という祝日を創設し守り始めました。さて、今日の福音書でも大勢の群衆がイエスさまのエルサレム入城を歓迎して、なつめやしの枝を振っています。なぜ彼らは、イエスさまを歓迎してなつめやしの枝を振ったのでしょうか。イエスさまの姿を見て、ユダマカバイを思い出したことに間違いはないと思います。彼らは第2のマカバイが自分たちをローマから救ってくれると思ったのです。

でもイエス様は、第二のマカバイとしてエルサレムに来られたのではありませんでした。ローマからユダヤを救うために、独立を導くために来たのでもありませんでした。イエス様の救いは、既存のものとは違うものでした。過去のイスラエルの歴史観によると、救いは戦争を通して、または神様の裁きによって行われました。徹底的に肉体的なものであり、この肉体的な救いによって、イスラエルは肉体的な平和を取り戻すことができました。しかし、イエス様の救いは、全く違ったものでした。人間の肉だけのためではなく、精神的なものであり、霊的なものでした。

今日の福音書の救いは、この霊的な救いを語っているのであり、延いては、この霊的な救いは、預言されたということも示しています。神様がイエス様をお遣わしになったのは、マカバイの独立とは違ったものでしたが、当時の人々はこれについて全然分かりませんでした。彼らの必要と肉적인経験が神様の救いを誤解させたのです。

今でも多くの人々は、この救いについて誤解しています。ある人は、死の恐れのために救いを望み、ある人は、自分の健康のために救いを望んでいます。ある人は、自分の心の平安のために、ある人は、自分の意志のために救いが臨むことを願っています。このようなことは、キリストの救いと全く関係ないものではないと思います。しかし、これだけが救いだと思うなら、これは正しくないことであり、イエス様の時代に肉적인救いを望んでいた人々と違いがないと思います。私たちの救いの目的は、イエス様に従っていくことにあります。この世でも、天の国でも、イエス様の教えに従って生き、イエス様から来る平安を享受すること、私たちの罪を赦され、神の子になること。これが私たちの救いであり、私たちが目指すべきことなのです。私たちが願っていること、肉の願いが成し遂げられることを救いと思っははいけません。救いは上から臨むものであり、下から上がるものではないからです。

今日の福音書に戻りましょう。今日の福音書で、イエス様はロバの子に乗り、エルサレムに行かれます。これはいくつかの意味がありますが、最も重要な意味は、イエス様は救い主として預言された人だということです。聖書の中で預言ということは、大きな意味を持っています。今、私たちにとって預言というものは、胸に響くものではありませんが、聖書にとって、特にメシアに対する預言ということは、非常に重要なことです。単に未来のことを予言しただけでなく、この預言を通して神様の約束の成就を示しているからです。メシアを通して私たちに救われるということ。これは私たち人間との約束であり、私たちを変わず愛しているという証拠でした。それで、この言葉を信じる人々は、メシアが来られるのを待ち、神様のいろいろな預言者たちは、メシアがどんな姿で来られるか、どんな証を残されるかを預言しました。今日の福音書4-5節の言葉も、メシアに対する預言の一つでした。「それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。『シオンの娘に告げよ。見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」

イエス様がロバの子に乗られたのは、預言を成就するためでした。神様が約束されたように、メシアが私たちのところに来られ、救いがこの世に臨んだということを示されたのです。そしてイエス様は、救いの完成のために十字架に向かって行かれました。多くの人々は、自分たちの願い通りに、イエス様がローマから独立をもたらしてくださいと思いました。預言のままにロバの子に乗られたイエス様を見て、その期待がさらに高まったでしょう。しかし、ロバの子に乗られたイエス様は、人々が望んでいる方向に行かれませんでした。肉적인救いのために、ユダヤの独立のためにお働きになりませんでした。霊的な救いを成し遂げるために、私たちに真の平安を与えるために十字架に向かって行かれました。これが預言されたメシアの働きであり、神様の約束でした。この世の多くの人々は、神様から肉적인救いを受けるようにと望んでいます。振られているなつめやしの枝を見て、楽観的な将来を期待し、人々の歓声を聞いて栄光を得ようと思ふかもしれません。しかし、そこには、神の国も、永遠の命もありません。人の欲望に支配された場所では、神の国を咲かせることはできないからです。それで、イエスさまは、十字架に向かって行かれました。人々に神の国を教えてください、真の栄光が何なのかを教えてください、なつめやしの枝に背を向けました。そして、ナツメヤシの枝ではない十字架を背負いました。

神様が私たちに約束された救いはこのようなものです。私たちの肉のための救いではなく、霊のための救いです。罪の赦しによって神の子になること、イエス様に従うことによって平安を得ること、神の国で永遠に生きること。これが神様が預言され、約束された救いです。だから、イエスさまに従う者に与えられるものは、なつめやしの枝ではなく、十字架なのです。今日、聖壇を飾ったこのヤシの枝は、礼拝が終わってから干して保管します。そして翌年、灰の水曜日に、干して保管したこの枝を灰にして、信徒たちの額にその灰で十字架を描きます。そうしながら、創世記3章19節の言葉を伝えます。「塵にすぎないお前は塵に返る。」なつめやしの枝の終わりは塵に返ることです。それで、神様の約束なされた救いは、ナツメヤシの枝ではなく、十字架の救いなのです。神様はご自分の約束が何なのか、その約束が私たちに何をもたらすのかを教えてくださいました。その約束が私たちの生活の中に現れますように。イエス様の救いと平安が皆様の心を導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン